

津

端

亨

編

纂

現代短歌分類辭典

新裝判
8 卷

現代短歌分類辞典

新装版 8 卷

通卷 1 6 6

昭和六十三年六月二十九日発行 定価一五、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五

電話 (〇四八〇) 三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三二一四

目次

目次

歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
一	三〇	二	三〇	四	三七
二	三〇	三	三〇	五	三七
三	三〇	四	三〇	六	三七
四	三〇	五	三〇	七	三七
五	三〇	六	三〇	八	三七
六	三〇	七	三〇	九	三七
七	三〇	八	三〇	一〇	三七
八	三〇	九	三〇	一一	三七
九	三〇	一〇	三〇	一二	三七
一〇	三〇	一一	三〇	一三	三七
一一	三〇	一二	三〇	一四	三七
一二	三〇	一三	三〇	一五	三七
一三	三〇	一四	三〇	一六	三七
一四	三〇	一五	三〇	一七	三七
一五	三〇	一六	三〇	一八	三七
一六	三〇	一七	三〇	一九	三七
一七	三〇	一八	三〇	二〇	三七
一八	三〇	一九	三〇	二一	三七
一九	三〇	二〇	三〇	二二	三七
二〇	三〇	二一	三〇	二三	三七
二一	三〇	二二	三〇	二四	三七
二二	三〇	二三	三〇	二五	三七
二三	三〇	二四	三〇	二六	三七
二四	三〇	二五	三〇	二七	三七
二五	三〇	二六	三〇	二八	三七
二六	三〇	二七	三〇	二九	三七
二七	三〇	二八	三〇	三〇	三七
二八	三〇	二九	三〇	三一	三七
二九	三〇	三〇	三〇	三二	三七
三〇	三〇	三一	三〇	三三	三七
三一	三〇	三二	三〇	三四	三七
三二	三〇	三三	三〇	三五	三七
三三	三〇	三四	三〇	三六	三七
三四	三〇	三五	三〇	三七	三七
三五	三〇	三六	三〇	三八	三七
三六	三〇	三七	三〇	三九	三七
三七	三〇	三八	三〇	四〇	三七
三八	三〇	三九	三〇	四一	三七
三九	三〇	四〇	三〇	四二	三七
四〇	三〇	四一	三〇	四三	三七
四一	三〇	四二	三〇	四四	三七
四二	三〇	四三	三〇	四五	三七
四三	三〇	四四	三〇	四六	三七
四四	三〇	四五	三〇	四七	三七
四五	三〇	四六	三〇	四八	三七
四六	三〇	四七	三〇	四九	三七
四七	三〇	四八	三〇	五〇	三七
四八	三〇	四九	三〇	五一	三七
四九	三〇	五〇	三〇	五二	三七
五〇	三〇	五一	三〇	五三	三七
五一	三〇	五二	三〇	五四	三七
五二	三〇	五三	三〇	五五	三七
五三	三〇	五四	三〇	五六	三七
五四	三〇	五五	三〇	五七	三七
五五	三〇	五六	三〇	五八	三七
五六	三〇	五七	三〇	五九	三七
五七	三〇	五八	三〇	六〇	三七
五八	三〇	五九	三〇	六一	三七
五九	三〇	六〇	三〇	六二	三七
六〇	三〇	六一	三〇	六三	三七
六一	三〇	六二	三〇	六四	三七
六二	三〇	六三	三〇	六五	三七
六三	三〇	六四	三〇	六六	三七
六四	三〇	六五	三〇	六七	三七
六五	三〇	六六	三〇	六八	三七
六六	三〇	六七	三〇	六九	三七
六七	三〇	六八	三〇	七〇	三七
六八	三〇	六九	三〇	七一	三七
六九	三〇	七〇	三〇	七二	三七
七〇	三〇	七一	三〇	七三	三七
七一	三〇	七二	三〇	七四	三七
七二	三〇	七三	三〇	七五	三七
七三	三〇	七四	三〇	七六	三七
七四	三〇	七五	三〇	七七	三七
七五	三〇	七六	三〇	七八	三七
七六	三〇	七七	三〇	七九	三七
七七	三〇	七八	三〇	八〇	三七
七八	三〇	七九	三〇	八一	三七
七九	三〇	八〇	三〇	八二	三七
八〇	三〇	八一	三〇	八三	三七
八一	三〇	八二	三〇	八四	三七
八二	三〇	八三	三〇	八五	三七
八三	三〇	八四	三〇	八六	三七
八四	三〇	八五	三〇	八七	三七
八五	三〇	八六	三〇	八八	三七
八六	三〇	八七	三〇	八九	三七
八七	三〇	八八	三〇	九〇	三七
八八	三〇	八九	三〇	九一	三七
八九	三〇	九〇	三〇	九二	三七
九〇	三〇	九一	三〇	九三	三七
九一	三〇	九二	三〇	九四	三七
九二	三〇	九三	三〇	九五	三七
九三	三〇	九四	三〇	九六	三七
九四	三〇	九五	三〇	九七	三七
九五	三〇	九六	三〇	九八	三七
九六	三〇	九七	三〇	九九	三七
九七	三〇	九八	三〇	一〇〇	三七
九八	三〇	九九	三〇		
九九	三〇	一〇〇	三〇		
一〇〇	三〇				

こめめ〔屈め〕	一五	こざさがはら〔小笹が原〕	二	こしたんたん〔虎視眈眈〕	一
こめめ〔小米・粉米〕	一〇	こざら〔小皿〕	三	こしつ〔個室〕	五
こめざくら〔小米桜〕	八	こざりし〔来ざりし〕	二	こしつ〔固執〕	四
こめばな〔小米花〕	二	こざる〔小猿〕	三	こしつ〔痼疾〕	九
こめやなぎ〔小米柳〕	一	こざる〔小笊〕	七	こしつ〔痼疾〕	九
こり〔凍り〕	一三	こざるども〔小猿ども〕	二	こしつ〔痼疾〕	九
こりこり〔凝り凝り〕	一	こざん〔孤山〕	三	こしつ〔痼疾〕	九
こりし〔凍りし〕	六	こざん〔故山〕	二	こしつ〔痼疾〕	九
こりし〔凝りし〕	六	こし〔越〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こりたち	一	こし〔越〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こりたる〔凍りたる〕	六	こし〔越〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こりたる〔凝りたる〕	九	こし〔腰〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こりつき〔凍り付き〕	四	こし〔濃〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こりつく〔凍りつく〕	三	こし〔古詩〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こり一つ〔凍り一つ〕	六	こし〔枯死〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こり一つ〔凝り一つ〕	六	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こる〔凍る〕	一〇	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こる〔凝る〕	一七	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
これーる〔凍れる〕	三	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
これーる〔凝れる〕	六	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
ころし〔子殺し〕	一	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こん〔古今〕	一〇	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こく〔小作〕	三	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こくそうぎ〔小作爭議〕	八	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こくにん〔小作人〕	四	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こくまい〔小作米〕	六	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こくりよう〔小作料〕	一	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こさじ〔小匙・こ匙〕	二	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
こさつ〔古利〕	五	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さど〔小佐渡〕	二	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さーむ〔越さむ〕	一七	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さむし〔小寒し〕	一	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さめ〔小雨〕	三	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さめしーて〔小雨して〕	二	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さかしき〔小賢しき〕	八	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さかしく〔小賢しく〕	〇	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さかな〔小魚〕	七	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さくら〔小桜・小櫻〕	三	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
さくらそう〔小桜草〕	一	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九
ささ〔小笹〕	八	こし〔ぞ〕	一	こしつ〔痼疾〕	九

こじ〔虚実〕	六	三三	こすう〔戸数〕	三	三四	こぞり〔挙り〕	六	四八
こじ〔故事〕	八	三三	こすぎ〔小杉〕	三	三四	こぞりき―て	二	四〇
こじ〔誇示〕	六	三三	こすず〔小鈴〕	九	三四	こぞりくる	一	四〇
こじ〔虎兇〕	一	三三	こすずめ〔小雀〕	四〇	三四	こぞりたち	一	四〇
こじ〔来じ〕	一	三三	こすずり〔小硯〕	一	三四	こぞりき―し	二〇	四〇
こじ〔固持〕	一	三三	こすな〔小砂〕	八	三四	こぞりたつ	二〇	四〇
こじ〔孤児・孤兒〕	六	三三	こすなまじり〔小砂まじり〕	一	三四	こぞり―たまへる	二	四〇
こじいん〔孤兒院〕	四	三三	こすもす〔コスモス〕	三七	三四	こぞり―たり	三	四〇
こじりよう〔孤兒寮〕	四	三三	こす―や〔越すや〕	四	三四	こぞり―たる	三	四〇
こじあけ―て〔こじ開けて・こぢ開けて・扶開けて〕	一	三三	こすり―たり〔擦りたり〕	四	三四	こぞり―つ	三	四〇
こじき〔古事記〕	三	三三	こすり―つつ〔擦りつつ〕	九	三四	こぞりて	三	四〇
こじき〔乞食〕	一〇	三三	こする〔擦る〕	四	三四	こぞり―ぬ	三	四〇
こじきげいにん〔乞食芸人〕	一	三四	こす―〔来す〕	二四	三三	こぞりあ―て	一	四〇
こじきごや〔乞食小屋〕	二	三四	こすえ〔こす多・梢〕	一四	三三	こぞる	四	四〇
こじきたいしょう〔乞食大将〕	二	三四	こずかい〔小遣〕	五	三三	こたい〔個体〕	四	四〇
こじきでん〔古事記伝〕	六	三四	こずたう〔木伝ふ・木伝う〕	一	三五	こたう〔こたふ・答ふ・應う〕	九	四〇
こじきほうし〔乞食法師〕	一	三五	こずち〔小槌〕	五	三五	こたうる〔答ふる・答うる・応ふる〕	三	四〇
こじきぼうず〔乞食坊主〕	一	三五	こづつみ〔小包・こづつみ〕	三〇	三五	こたえ〔答・答え・応え〕	九	四〇
こじま〔小島・児島〕	一七	三五	こせい〔個性〕	二	三六	こたえいる〔こたへある・堪えいる〕	一	四〇
こじまわん〔小島灣・児島灣・児島灣〕	一	三六	こせき〔戸籍〕	二	三六	こたえ―ず〔応えず・答えず〕	二	四〇
こじやり〔小砂利〕	三	三七	こせん〔古銭〕	三	三七	こたえ―たり〔応えたり・答えたり〕	二	四〇
こじゆけい〔小綬鶏・小綬鶏〕	三	三七	こせん〔弧線〕	三	三七	こたえ―たる〔応えたる・答えたる〕	二	四〇
こじゆんれい〔子順礼〕	一	三七	こせんじよう〔こせんぢやう・古戦場〕	一	三七	こたえ―つ〔応えつ・答えつ〕	二	四〇
こじよう〔古城〕	四	三七	こせんすい〔枯山水・かれさんすい〕	一	三七	こたえ―つつ〔堪えつつ〕	二	四〇
こじよう〔湖上〕	三	三八	こそ	三三七	三七	こたえ―つつ〔堪えつつ〕	二	四〇
こじようまつり〔湖上祭〕	一	三九	こそあらめ	二	三八	こたえ―て〔こたへて・応えて・答えて〕	一	四〇
ごしよがき〔御所柿〕	二	三九	こそぐり―て	二	三八	こたえ―ない〔こたへない・答へない・答えな	一	四〇
ごじようき〔小蒸気〕	二	三九	こそこそ	一	三八	い〕	一	四〇
ごじり〔蚕尻〕	七	三九	こそこそと	四	三八	こたえ―ぬ〔こたへぬ・応えぬ・答えぬ〕	二	四〇
ごじり〔湖尻〕	二	三九	こそで〔小袖〕	四	三八	こたえ―む〔こたへむ・応えむ・答えむ〕	一	四〇
こじる〔扶る〕	四	三九	こそばゆ	一四	三八	こたえ―よ〔こたへよ・応えよ・答えよ〕	八	四〇
こじわ〔小皺〕	三	三九	こそばゆく	九	三八	こたえ―る〔こたへる・答える・応える〕	一〇	四〇
こじん〔個人〕	五	三九	こそばゆし	三	三九	こたえ―ん〔応えん〕	一	四〇
こじん〔古人〕	三	四〇	こそやま〔古処山〕	七	四〇	こたく〔古拓〕	一	四〇
こじん〔故人〕	六	四〇	こぞ〔去年〕	二	四〇	こたく〔小竹〕	六	四〇
こじん〔越す〕	一五	四〇	こぞう〔小僧〕	三	四〇	こたけこや〔小竹小屋・小竹小舎〕	三	四〇
こす〔灘す〕	一	四〇	こぞことし〔去年今年〕	三	四〇	こたけはやし〔小竹林〕	二	四〇
こすい〔湖水〕	一〇	四〇	こぞ―の―ゆき〔去年の雪〕	八	四〇	こたけはら〔小竹原〕	七	四〇
こすう〔個数〕	一	四〇	こぞめ〔濃染〕	九	四〇	こたけむら〔小竹群・小竹叢〕	七	四〇
			こぞめおちば〔濃染落葉〕	一	四〇	こたけやぶ〔小竹藪・小竹やぶ〕	六	四〇

こたち〔娘達〕	六
こたつ〔炬燵〕	二七九
こたつしーて〔炬燵して〕	二二
こたつーのーま〔炬燵の間〕	一一
こたつび〔炬燵火〕	一一
こたて〔小蓼〕	一一
こたね〔子種〕	一一
こたび〔此度〕	七
こたん〔枯淡〕	七
こだい〔古代〕	四
こだいじん〔古代人〕	四
こだかい〔小高い〕	一
こだかき〔木高き〕	一三
こだかく〔木高く〕	一六
こだから〔子宝〕	二
こだくみ〔木匠〕	三
こだち〔小太刀〕	二
こだち〔木立〕	九八
こだま	二
こだま〔木霊・笹〕	一〇四
こだまし〔笹し〕	二七
こだましーつつ〔笹しつつ〕	一
こだましーて〔笹して〕	四七三
こだましーぬ〔笹しぬ〕	四七三
こだます〔笹す〕	六
こだまする〔笹する〕	七
合計	二二、三六九首

こころ【名詞】(心・情・意)

衣縫へど心そぐはず此の部屋はサルビヤが映えて緋の玻璃戸なり
 昨日おもひ今日は忘れてあすの日はあすの心とかしこき教③
 昨日買ひし毛布が押入の中にありてこころゆたけく一日居りたり④
 昨日きて雨の今日きて苔寺の苔のふかさを心にうつす④
 昨日今日心きまりてありと言はずわたくし事はなげやられつつ(支那事
 変戦地)
 昨日今日こころに秋の映りきぬ庭草すこし丈の延びつつ②
 昨日すみ今日はあらぶる山のうへの湖のこころを思ひつつある①
 昨日より今日はのびゆく草の芽を木の芽を見れば心あかるし(豊後雪)
 帰農せむこころわきくも露の葉は庭一面に陽をあびるも①(現代短歌大
 系)
 昨日なく明日は思はず今日の日に心の凝れば正月といはぬ⑧
 昨日まで朝から晩まで張りつめし あのことろもち 忘れじと思へど
 ②
 紀の海のふかきこころをくみかねて御前の浜になく千鳥かな
 昨日より遊び呆けてゐたりしが夕かたまで心たかぶる
 昨日よりねむりふけりし心さぶし岬山の上に朝の虹立つ
 木のかげの青き朝の道にしてひとこころをゆるされてゐる②
 木の皮を食ふと剥ぎある写真なりあやしくもわが心囚へる①(伏魔)
 紀の国の 橘にほふ 山の上に 心かぐはしき 君をはふりぬ②
 紀の国の高野の杉を移し植ゑし人のこころの思ほゆるかも(玉砂集)
 茸かりにいゆく少女に言葉かけこころかなしも国へ帰らず
 樹の心くさの心もみな知りてあしたゆふべにわが向ひあふ④
 木の心水のこころに居たまふに選ひがたき君わが探ねゆく①
 木下路あかき椿の散り敷けばこころ変りぬ島にこしごと④
 樹の下にひとり来りて何か欲るあまなふ心われ持たなく①
 木の下の暗みゆくまでて親し慕は心の還るものゆゑ①
 樹の白く裂かれし如くいたましき心きたりてわれをさいなむ(陰影)
 黄の柵の無くなりし歩廊たまゆらは心揺らぎて歩みあたりき③
 材の中の像彫るごとく尋ねゆく心はあれど言葉は及ばぬ②
 喜の波ぞ今湧きたたかひを憎む心の集まる処④
 木のはなのしろきをみれば曇日のしづかにわがなりにけり
 木の花にしるき蝶ゐて曇日の林しづかなり心にぞ沁む
 黄のバラのおとろへたるを切りおとす心いためる朝影の中①
 きふ買ひし実践論を読まねばと心あせりつつ針を運びぬ

原 菊枝 柳 原白蓮 吉 田正俊 鈴木 康文 城 木正太 與謝野 晶子 森 山縫子 佐佐木 信綱 佐 藤 嘲 花 窪 田 空穂 石 川 啄 木 高 崎 正 風 竹 尾 忠 吉 五 味 保 義 米 田 雄 郎 谷 田 海 南 下 村 国 一 峯 村 千 一 古 泉 英 一 松 村 梨 花 枝 浜 梨 花 枝 與謝野 寛 平 福 百 穂 浜 梨 花 枝 前 田 夕 暮 高 安 国 世 田 谷 鋭 尾 上 柴 舟 前 田 夕 暮 前 田 夕 暮 金 子 信 三 郎 城 内 智 恵 子

きのふけふのあわただしさあわただしき心に西の焼けたるを見つ①
 きのふけふ病みてひとしほ素直なる人のこころを寂しめけり⑤
 きのふけふわれ健やかに軒をはげばこころよからん隣の人らも①
 昨日すみ今日はあらぶる山のうへの湖のこころを思ひつつある①
 昨日坐りし畳の上に対きあへどこころ覚めゆく子ははどまらず②(現代
 短歌全集)
 きのふまで国に^{したが}ふこころざし詐偽られるしを怒り訴ふ①
 昨日よりねむりふけりし心さぶし岬山の上に朝の虹たつ
 きのふわが心とがりて抜き捨てしタンポポがあはれ花ひらきをり①
 木の芽張る山の静けさひとり来てひそかにをれば心ときめく(新萬葉集五)
 木の芽吹くあかるき南風ききにつつ春病む心のひたにさぶしも(多磨三
 月)
 気はあがり心をどりてこの夜ごろねられざるらむますらをの友^{けんわれ}
 樹は青葉われのこころは復ち^き炎えて牧野博士をこほしみやまず④
 きはつればきほふ心をいまはほも人には秘めじわれ起ちゆかむ(新萬葉
 集)
 木は揉まれ松の花粉^{はなこ}はあてに散る身を伴はぬ心のやうに②(岩波文庫)
 黄ばみたる梅の実ひとつ食らひたるとも或日の心足らひか①
 黄ばみたる芝生のうへののんびりと寝てみたる秋の午後^{ひるご}の心⑦
 きびしかりし労働の歌いくつかが人の心にかがやかむかも③
 きびしかる暑さとなりて向日葵の黄のかがやきに心いきほふ②
 きびしかる心に染みて山がはのさをどる波は吾に近しも(小園)
 きびしきに立ち交はりて生くとをため心くづるな如何成る時も①
 きびしきを乗りこえむ心すでにして高きに向ふむしろきびしく③
 きびしくも心痛めし病いえて老ゆる命もしるしありけり③
 きびしくもわれを究めぬきほひたる心やうやくゆるがざるとき①
 寄附うけてつくづく思ふおしなべて貧しきものは心の篤き③
 着ぶくれの老先生にけふぞまみえ心通ふなり山の国に来て①
 奇峰来て座にし着ければなごやかに心たのしくなりてしものを④
 きほひ心もちて仕事にはげみしは既に過去にて夢のごとしも①
 きほひたつ青葉の育ちいちじくる鼻に感ずれば心は圧さる④
 きほひたつ心ひそかに抑へつつわがあけくれは寂かに生きむ⑥
 きほふ心もなくなりにけるかなや五月一日かぜひきて居り⑥
 希望もてと己れこころを促して歩める吾に稼ぎがありや⑧
 きまぐれに一人ひとりを愛しゆくこころかと思ひ涙ぐみけり①
 樹まれば幾千年の遠い先に通ふ心現と覚えす⑤

大 橋 松 平 太 田 水 穂 三ヶ島 葭 子 森 山 縫 子 五 島 美 代 子 小 名 木 綱 夫 五 味 保 義 鹿 兒 島 や す 子 高 島 儀 太 郎 成 田 あ き 子 金 子 薫 園 岡 野 直 七 郎 水 上 す ず 子 與謝野 晶 子 池 原 檜 雄 金 子 薫 園 斎 藤 茂 吉 高 橋 希 人 斎 藤 茂 吉 都 筑 省 吾 小 宮 良 太 郎 久 保 田 不 二 子 三 浦 義 一 松 木 静 子 松 井 如 流 窪 田 空 穂 関 田 得 一 郎 生 田 蝶 介 松 田 常 憲 斎 藤 茂 吉 高 田 浪 吉 奥 川 夢 郎 矢 代 東 村

君あらでわが世は寂しうら悲し真実しんぞこころ細やの③
 君あらぬ心の塔はかたむきて夕の空にさびしくも立つ①
 君あらぬもとな心は言に言はず秋の日照らふ山頂をゆく④
 君あらばと思ふ心もはかなくてけふ比企の山霧に越えゆく⑤
 君ありて心かなしくよみにける羊齒軍の根もとも終に見がたし②
 君ありてわが生きの身の身の生き足りし悦びあれぬこころあたたかし①

① 君ありと思ふに心なぐさみぬ書き交さねど遠く住めども⑭
 君ありと思へば心安かりき相見ることの稀なりし日も①
 君在りと思ふばかりは知れどもその心はたいづくにかある③ (現代短歌大系)

君うばひて逃れにし日の心ふとかへりぬ夜の町を歩めば③陰影
 君永久に無辺に満てるあめつちの広き心に還りけるかも⑨
 君おもひつとほほえむはくらやみのこころに咲けるあやかしの花②
 君思ひ遠河の岸に見て立てば柳絮と共に飛ぶ心あり (新万葉集二)

君おもひわかきこころの躍る時冬のさむさも忘れつる時②
 君おもふ心とあはれむしはし肺とを抱き死まよふかな①
 君おもふ心に似るか春の日のたそがれがたのほけきあかるさ (はつ恋)

君憶ふ心一つを傾けて五十余人あり聖王寺の秋①
 君思ふこころ極まり坂路をば息をもつかずひたのぼりけり①
 君思ふ心いよいよ切なかり逢はで流るる時のまにまに
 君思ふ心ただちに形づくる若く白く清くやや長き顔⑭
 君おもへば花ぐもりする日のごときこころのなやみ覚えつるかな②

君おもへば美しく界あり四方より心とほりて光さしぬれ⑨ (現代短歌大系)

君かへる夜の電車のあるさを心さびしくおもひうかべつ② (現代短歌大系)

② 君が愛に心驕れる故ならばこのさびしさも数にはあらねど
 君が愛に掩はれてゐるこのこころ瞳ひらかぬさびしきこころ (現代短歌大系)

③ 君が家に近き小川のなびき藻の心向けしは誰にかあるらむ
 君が家を見おろす山にむらさきの心足らひてわがりにけり①
 君が息こたこたもれる空気枕ひねもすまきて心かなしも
 きみがいへのま哀し心偶び居れば雪ふる森に鳥ぞ相なく①
 君が教へやや飽きたれば庭の百合カンナに遊ぶ心ゆるさせ (冬より)

君が肩漣うちぬあはれ今いたいたしくもこころ泣くらむ (水柱記)

君が髪思ひの外に長くと云ふましてこころを何と知りきや (佐保姫)

吉井 勇 関戸 信次 田谷 鋭 松村 英一 藤森 朋夫 立岩 茂 與謝野 晶子 西田 幾多郎 柳原 白蓮 前田 夕暮 與謝野 寛 矢沢 孝子 赤木 毅 吉井 勇 田波 御白 土岐 善磨 松井 如流 矢代 東村 堀口 大学 尾上 柴舟 岡 稻里 與謝野 寛 前田 夕暮 狭山 信乃 狭山 信乃 正富 汪洋 中島 哀浪 潮 みどり 蕨 真 谷 鼎 吉井 勇 與謝野 晶子

君が画のうちにひそめるあるものにわがこころみな吸はれけるかな②
 君がくちすひてはなさず千とせあらばわれのこころのあくことやある
 きみがこころみだれもせむと酒杯は持たしめざりき今にして悔ゆ④
 君が心よく知るといはばわが友は怒りて顔の色変へつべし⑤
 君が心余りにも見え見ぬ術の今は欲しきと云ひし人ほも⑧
 君が心満ち足りて大死は遂げぬ愚かなるわがなげき盡きぬに①
 君が心重く誘ひし黄の菖蒲病院の庭の樹かげに咲きぬし②
 君がこころわがたましひのふるさとにきのふなかりし冷たき風吹く①
 君が言すがの蜂の螫すに似ぬ心ほてりてかそけく痛し⑨
 君がこころわがこと知れるやから居ても言ふ時は心くもりぬ (春泥集)

君が好むりんだうの花ぞいかばかり心躍らして摘みたまひけむ①
 君が才をあまり妬しと思ひながら待たるる心神ならで知らじ① (みだれ)

① 君が梳く丈の御髪を心にくうたはむれ過ぎぬ山の朝風③
 君がため祈るこころも浅ましくわれに執するうれひなりけり
 君がため袈の衣着る姿より更に心のあはれなりけれ⑨
 君がため心つくしてまめやかにつかふる臣の多き御代かな
 君がため春の草よりやはらかに今日の心は青みたるかな
 君が父の一生思へばありがたき祖師の心にくと通ふもの②
 君が父は我をさげすみ君をうばひ心すがすがるにやあらむ②
 君が計に心は萎えてわが越ゆる猿羽根の山に月読の照る③
 君が手とわが手とふれしたまゆらの心ゆらぎは知らずやありけむ①

② (現代短歌全集)

君が手に折られし花を白萩をこころあると思ひきわれは①
 君が手のあるかなきかの微動にもいたましく鳴る我がこころかな①
 君が手もふるへぬさればわが心ややはらぎて強くにぎりぬ①
 君が文待つこころも幕あきを待つとし云はばひと笑はむか①①
 君が身につけ給ひし服外套着つつしわれの心つつしむ①
 君がもつ心の矜りいつの日の如何なる時も高くもち敢へよ
 君が代ののどけき春をあふぐかな高きいやしきひとつこころに (新年御歌)

③ 君が代は山にすまむとねがはねど清き川にぞこころひかるる (新年御歌)

④ 君が代を祈るこころは神路山高きいやしきはらざりけり (新年御歌会始)

⑤ 君がわれをさげすむ心ありありと夜半にめざめてそれよりは寝ず②
 君きたり触れなば散らむ髪よりもはかなきさまの心知らぬな③

岡 稻里 天野 謙二郎 岡野 直七郎 窪田 空穂 窪田 空穂 美禰 国樹 山田 百合子 富田 碎花 與謝野 寛 與謝野 晶子 大悟法 利雄 與謝野 晶子 九條 武子 茅野 雅子 與謝野 晶子 昭憲 皇太后 関戸 信次 吉井 勇 斎藤 喜博 井出 一太郎 太田 水穂 服部 躬治 萬造寺 齊 矢代 東村 吉井 勇 南原 繁 宇都野 研 長谷 信成 阪 正臣 森川 頼次 斎藤 喜博 與謝野 晶子

君恋しされどもわれは心おさへあらばや人はつれなきものを 君恋ふるこころ仏も与力せず土すら花をおぼしたてぬる⑨	天野 謙二郎
君恋ふるおもひきのふにかはらねどこころとらへし死なり神なり①	富田 砕花
君恋ふる心のかげに亡母憶ふ稚き情つねにひそめる （現代短歌全集）	岡本 かの子
君恋ふる心は直しこれをもてわが生涯のあかしにぞする⑨	與謝野 寛
君去らば二人もたれし糸柳芽をふくごとに心痛まむ①	萬造寺 齊
君死なば思ひなけむと知りえたる日より心は逆しまにゆく （春泥集）	窪田 空穂
君死にて三とせを経れどこころざし今に繋がり生きをる如き⑩	矢代 東村
君すてて他に生きやうもなかりせば命なんと心きめける①	岡代 稻里
君訪へば画室にたてし大鏡、なにとはしらずこころさむかり①	矢代 東村
君達のやることを見て心つよし時代はまさに新しく⑦	吉井 勇
君遂に謎の女となりけりわれその心解きがたきゆゑ （未完記）	内山 賢次
君つれなしつれなき君を恋ひ止まぬその男心を憐みもする①	岩満 千恵
君と在りてひまなく事に追はれつつをみなご吾の心足らふも①	中原 綾子
君とあればわれとわが見る心さへ悲しきまでに美しくきかな③	岡野 直七郎
君と来て大宮の辺に額伏せばこころ極まり涙し溢る⑤	與謝野 晶子
君と恋ふよろづつして魔よけせむ心ながらに見えぬものから （常夏）	和田 山蘭
君と共に木枯聞きて歌よみし昔にこころ帰る日もあり①	吉井 勇
君と別る紅より藍にうつりゆく心のいろの眼にうつる時①	與謝野 晶子
君とわれ語るに心はづむとて若さに帰る日かと思ひし⑩	島 秋人
君とわれ触れあふ日なき愛に燃え心添ひつつ清められたり①	中原 綾子
君とみて輝きわたるわがこころ常にもかくてあらしめたまへ③	武山 英子
君に逢はばこころゆるみてみづからを失ふことのありやしぬらむ①	天野 謙二郎
君にくしとらみしこころいかになりしぞかくばかりにも恋しきものを	吉井 勇
君憎やはら立たしやと思ふとき稲妻するはこころよかりき⑤	富田 砕花
君にしもおほかたこころとられけむときさへかなし妹とよびぬ①	三 苦京子
君に添ひて日ざかりの野路を通ひつつと燃えそむるわがこころあり①	大橋 葎房
① 君にだに告げざる心誰にかも言ひて告げなむ告げずて已みなむ	與謝野 晶子
君に問ふこれ百年の後なるやはた心のみへだたりぬるや⑩	吉井 勇
君に問ふものゝ乏しきなほ耐へむ心の貧はいかにすべきや②⑦	矢沢 孝子
君になれこころすさむと逢ひながらひそかに思ふおそろしき宵。②	與謝野 晶子
君にまた他人につけて我こころあまりに優しあやまちや見ん① （夏より秋へ）	與謝野 晶子

君により得たえでわぶる吾心闇の松原いまゆくがごと④	安江 不空
君の来りて我が心を奪ふなる、黙しつゝ我が生の貧しさを顧みる日に③	松村 英一
君の心いま失ひて何せむに一夜は明けて雪積りぬし	三国 玲子
君の心ゆたけくもあるが故ならむわれはと笑ふ声のよろしさ①	原 真弓
君の心吾に近づくをただ待り聡明に愛せよ人には言ひつつ	三国 玲子
君の心民の心と相あひて大天地に満ちさかえなむ⑥ （春旗雲）	佐佐木 信綱
君のこと思ふばかりにかたむけるこの心をや恋と云ふらむ①	矢沢 孝子
君の書を好みて吾の読みし日は心に痛み持てる日なりき⑥	岡野 直七郎
君のただたのしくあれば足るといふわれと愛しき心なるかも	潮 みどり
君の為まことの心あらませば雲の人の数にもれなん⑤	井上 文雄
君のまさば君一人こそ知らしなむいつきつかふるけふのこころを①	丸岡 桂
君の善き心は我を生かすなり国の異る意識より強く③	高安 国世
君は氣を移すうつり来てわれの心もすこし違ひぬ④	長沢 美津
君一人えたる重荷にたえぬやう心ぞふるふ信あらぬ日を②	前田 夕暮
君ふたたびわれになどひそかの頃のやさしかりにし心のなげき①	奥川 夢郎
君まこと我ごとく強き心もたば共にぬがずやそのちりごろも①	丸岡 桂
君まさばまさばとばかりことごとくに心よわくもなりそめしかな （はつ恋）	土岐 善麿
君見ざる心の上を唯過ぎぬ人のよろこび人のかなしみ⑩	與謝野 晶子
君見よと烽火を揚げんさかひにもあらず心のうちに忍ばん②⑩	堀口 大子
君見るもわれの心に蔭多く恋もかなしくなりけるかな	與謝野 晶子
君見れば心たちまちときめきぬものゝ蕾の花咲くごとく⑩	與謝野 晶子
君見んと心の進むそれのごとく春より変る夏の待たれし⑭	南原 繁
君逝きて砦 （かた） の村にのこる友今宵たづねて心なぐさむ①	岡本 かの子
君行きて心も冥し白砂に降るてふ夜の雪黝み見ゆ （新萬葉集九）	三 條西季知
君行きてすまむ国なり今よりは大島おろしこころしけふけ	與謝野 晶子
君行きてたのもしげなくなりつと心みづから蔑むはわれ （青海波）	柳原 白蓮
君ゆけばゆきし淋しき君あればある淋しさに追はるるこころ③	長塚 節
君によりなごむ心はにひ葉に包む海風のしかとくること①	岡 稻里
君をうとくおもふこころの底ひより、またあふれ来るあはれみ心①	佐佐木 信綱
君を思ひ我が心ゆく須磨の朝は淡路を恋ひて真白帆のゆく③	昭憲 皇太后
君をおもひ民をかなしむ心をもいまはとすてし身こそをしけれ①	吉井 勇
君をおもひわかき心のをどる時冬のさむさも忘れつつの時	佐佐木 信綱
君を思ひ我が心ゆく、須磨の朝は淡路を恋ひて真白帆のゆく③ （新月）	吉井 勇
君を思ふ一函のこころありとしも知らば千代竜何と云ふらむ⑦	吉井 勇

君をおもふふかき心はみなと河かへらぬみづにいまも見えつつ (新萬葉集)

君をおもふこころ神なりみつ栗の中のますらを高山のぬし①

君を恋ふこころと山を恋ふこころ相争ひてねむりかねつも⑬

君を恋ふ少女もあれなわれをめづる君が心の深き知るべく①

君を恋ふといふ大秘密一つおきみな語りけり心隔てず①

君を刺し死なんとぞ思ふ何処まで沈む心ぞあがる心ぞ

君を偲び君をあはれび青浪のただよふ心あやしわれは

君をしのぶ民のこころにくらぶればまだまだあさし今朝の白雪①

君をにくむにくむわれをば言ひときて心はなほも恋ふるにかあらむ①

君を待つ心のやうに花束の花かわき行くこの夜ごころかな (春泥集)

君を見て渴きを覚えぬ紫に晴れ渡りたるわが心ゆえ

君を見てわが心ただ燃えしのみ本意を遂げねば恋もはかなし⑤

君を見ん明日の心にさきだちぬ夕雲あかき夏のよろこび①

君を愛づなき第一ふかければ第一こころ闇と似たれば

奇妙なる人形ひとつ、時々踊り出る如し我が心より⑦

決めがたき心かなしく眠りえずつひにわが聞くあかつきの三時①

樹も土もうるほふ雨に自らこころはなぐよやさしくもの言ふ②

着物きせてやる間も何か話しかく子らの愛しさに心みちて居り (多磨三)

きも迎ふこころゆたかに君と臣とともにことほぐ千代の春かも (新年御)

肝むかふ心のうちに時として青く澄みたる海ぞさわだつ②

肝向ふこころ一つに思ふぞとひとりし言ひてひとり淋しき④

肝向ふ心利もなし草萩のしげみに杖を立てらくわれは⑨

肝むかふ友は心に吾をおもひこのたまものをわれに食はしむ (小園)

郷愁はましてこころの郷愁は悶ゆるばかり堪へがたうなりぬ①

強心剤の注射にととのふ脈搏をこころ待みて居眠るわれは②

姉妹のをさな児を使ひに出しやりて心にひびく遠きサイレン

郷土史も心にしますゆきもどり墓群中の日にゑふわれは⑤

京なまり国語のふみにまじりきく柔らかに春の朝のこころに

享楽の心にむかふ人のむれの奈落の底にくだりゆくすがた⑦

客の座に酔ふ汝がこゑの聞ゆればきこゆる声にわが心燃ゆ①

キヤラメルをなめてゐる子の童心にわれもなりつつちよねちよねと舐

め①

救援の策ありといふソ宇宙船こころぬくもるその噂はや②

九官鳥のなく声さびし昼日中こがれて歩く吾の心に①

有栖川宮妃董子

金子元臣

吉井勇

矢沢孝子

矢沢孝子

與謝野晶子

望月光

落合直文

田波御白

與謝野晶子

原田琴子

吉井勇

三ヶ島霞子

堀口大空

三ヶ島霞子

石川まさ子

佐久間悠

大原重朝

高橋希人

太田水穂

尾山篤二郎

斎藤茂吉

富田碎花

森園天涙

川端千枝

鹿兒島壽藏

金子薫園

島木赤彦

生咲義郎

岡本大無

田谷鋭

松倉米吉

球根を伏せゆく夫のうしろかげあつき心にまもられきわれは②

宮城にぬかづく国民すでに多くこぞり立ちたる心ぞ清明き⑥

旧宅の碑に朝の日のどけし心今もここに住むらむ歌人言道 (瀬の言)

急停車したるジープの何すやと心は寄り道と道と曲りぬ (書あらし)

結ばれし心やはむ下りきて峽のゆふべの空明るめば①

窮屈さも本能なれば苦にならぬををさな心に移して思ふな

休日世阿弥の能に心遊び鎮まらんとす冬長き夜を②

宮城の御濠の水のひたひたと満ちたる見れば心やすらふ⑤

旧宅之碑に朝の日のどけし心今もここに住むらむ歌人言道⑨

消ゆるもの皆ええゆくと思へども生ける心のやりどころなき①

今日あたり友は戦地につきつらむよりどなきけさの心に思ふ (支那事変統)

後

今日ありて明日さえ知らぬ益良雄は明き心をもちて行きける⑥

今日癒えて病院を去る人見てはうごく心もはかなかりけれ②⑩

今日一日心くるしみぬし吾の頼伝ふまで目薬をさす①

饗宴のただなかにして君おもひこころ遽にさびしくなりぬ①

今日起きて、三夜を徹すが為事、心悔いつつ、たひらかにあり

教会のベンチに心しづまれば朝鳥の音は我を浄めぬ⑦

鏡花作いくつよみつらむい逝きしと知りて幾日こころ親しむ②

今日今日とこころしまちてゐたれども母よ妹よつひに帰らぬ

教草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ

教室より抜け出でてすみなたたずめる一人の児童こころより去らず①

教師われに羞らふこころもつらしき子らのしぐさよ目に立ちて来ぬ

(新萬葉集九)

今日すでに昨日のあらぬ幼児のもの壊しつつこころ育つを②

夾竹桃の白さきかけて咲く庭に独心をやりて病み伏す②

今日著きし友の歌集を灯のもとにひろげてひとり心さえ返えをり①

京なまり口語のふみにまじりきく柔らかに春の朝のこころに

今日なれどなほも昨日の我を見るこころ昨日に残りしゆゑに①

今日の朝早起すればいとまあり心したしく硯を洗ふ

今日の日の証券の欄よむ事も心にあはし昼の一時間③ (角川文庫)

今日の日の如く心のはればれと仕置の台に人上りけむ⑪ (葉月集)

今日の日も生きながらへるうつしみの心しづかにあらしめたまへ

今日の日も土に耕すよろこびを心に持ちてしばしば慰む

今日の日を忘れず訪へる人あるにこころ哀しも人の親われは⑨

今日はいか愛しきこころきはまりて地平を見たり日の入るところ

松本滋代

吉植亮

佐佐木信綱

谷上とわ子

宇都野研

遠野左田子

岡野直七郎

佐佐木信綱

山川柳子

岡和一

半田良平

與謝野晶子

富小路禎子

吉井勇

積邨空

今井邦子

村田利明

高田浪吉

明治天皇

池原檣雄

湯浅清

隅田葉吉

遠野左田子

早川幾忠

金子薫園

吉井勇

舟崎静枝

近藤芳美

尾上柴舟

長沢美津

土屋文明

窪田空穂

小泉三

今日は今心のゆくにまかせたる旅人の身にいふは何ごと （惟の木）	佐佐木 信綱
今日はこちら軽くあかるし癒えゆかばこれをせむあれをせむなどおもふ	田 波 御 白
今日はこちら豊かにあらむ宗達の源氏屏風を胸にゑがきて ②⑥	吉 井 勇
今日はこちら軽くあかるし癒えゆかばこれをせむあれをせむなどおもふ ①	田 波 御 白
今日もしも昭和四十年元の日 （はじめ） こころ新たに遠き望まむ ②③	窪 田 空 穂
今日は病やこころよし曾て見し青き山河眼にうかびくる	金子 薫 園
今日ひと日心のままにさまよはむ見よ高原の草青みたり （新万葉集七）	平 賀 春 郊
今日ひとつと近所の子等と遊びたくなり呼べと来らず。こころむづかし （悲しき玩具）	石 川 啄 木
狂暴のこころ湧ききて 庭土に蟻むらがるを 踏みつぶすなり ⑤	渡 辺 順 三
経もあり仏もあれば我もありこころのおくに亡人もあり ②	天 田 愚 庵
今日もまた糸瓜の花は落ちつづけ一夏を籠る心倦みたり （新萬葉集八）	宮 代 直 吉
今日もまたきのふのことをくりかへすととりとめなさに心なづみぬ ②	河 杉 初 子
曲庵にこもりてあれど吾心総の八丘を飛びさまよへり ③	安 江 不 空
曲玉のつくりかけ見れば遠き世の人の心の可愛くおもほゆ ②	木 下 利 玄
去就の心定まらず夾竹桃しとどに雨に濡るるをみてゐる （新萬葉集八）	米 良 た ね
去年もきて心にしみて見し花の老木のさくら枯れてありけり ⑤	太 田 水 穂
虚無となる心ほそくも生くる間は縫らむ道ぞ狭くともよし ④	谷 田 水 穂
今日会へば髪形の変わり鑄てわれの心を新しくする ①	立 花 馨 村
今日一日心ゆくばかり降れよとぞつゆの終りの雨音を聞く （新萬葉集九）	越 前 翠 村
凶作地の人の心に附込むはあやしき御詠歌節昭和神聖会	結 城 哀 草 果
教室のすみにかざつたその花を見るたびに心も美しくなる （児童萬葉集）	五 節 賢 治
今日しわれ此の妙高の人を見てかたくな心とみに和みつ ③	岡 本 大 無
今日の日は心に沁みて味ふとたけはいひし年若くして （青あらし）	谷 子 信 三 郎
今日のわれは激つ心をおししづめしづかにと戒めて居り ①	金 子 信 三 郎
京は寺寺は真白き枇杷の花人の心の静けさに咲く ①	沼 波 美 代 子
今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり 呼べど来らず こころむづかし ②	石 川 啄 木
今日もかも国府津の海の浪は荒しこころ行くばかり響きとどろき ②	尾 崎 孝 子
今日もまたしきりに胸が痛む暗い心が窓から梅雨空をながめてゐたの	渡 辺 順 三
だ ①	金子 信三郎
今日よりは皇子のきさきと内ふかき心願たしめ給へ庶民に近く ①	松 田 常 憲
清き死をねがふ心もわたくしのありとしいふに深くうなづく ⑥	明 治 天 皇
きよき瀬に人の心をみちびくはこの山水のうつし絵にして ②	

清きをば守らんとして敗れたる心の如く野薔薇散り敷く ①④	與謝野 寛
清く明る直き心もてとこしへに大宮どころまもり立たすも （黎明）	佐佐木 信 綱
清くして寂しき極まる月宮殿に想ひ到りし心にふりゆく ②	水 町 京 子
清ければ若くしあればわがこころそらへ去なむとけふもかなしむ ③	若 山 牧 水
巨大なるものに惹かるるわが心いくたびか肌荒き富士を仰げり ④	山 田 百 合 子
去年借りし草の枕が心引く宮城野橋に至りけるかな （心の遠景）	與謝野 晶 子
貴人も心あはせてくのにのためいたでおふ身を護る世なりにけり ①	昭 憲 皇 太 后
清正が持ち帰りつとふ蹲踞の「釜山」に向ひ心すすぎし ⑥	榊 富 照 子
清水に庵を結びたまひたる心おせへば文字もかすみ来 ⑧	堀 内 通 孝
清めたるあしたの部屋に「以心先人」の額残れるも今はそぐはず ②	生 田 蝶 介
清めたる社前は廣しあさまだき詣でむとして踏む澄み心 ④	尾 山 篤 二 郎
清らかに降れる雪わが心をば今朝拭ひさりあますことなし ①（現代短歌大系）	豊 島 晃
清らけき心保ちて生きんとし我が下心引きしめにけり美穂	潮 藤 史
清らけく朝川わたる風の音に心は澄みて人のこほしき	斎 藤 史
きらきらと心の中の戯意あり気付かぬふりをされてゐて憎し ⑥	長 谷 川 銀 作
気楽さうに何の気もなげに木を挽きをる長期囚の前は心して通る	和 田 山 蘭
きららかに身の光りてもありなましこの秋の夜のこころうつけは ①	朝 吹 磯 子
きらきらと切れし二の絃つぎ合せ締むるこころか秋のをはりに	北 原 白 秋
断崖に清水したたるなりゆきをこころにとめて坂をのぼりぬ	細 井 魚 袋
きりぎしに茶館ならべり江を下りきり心やすらに博うつ船子 （遊清吟集）	佐 佐 木 信 綱
断崖のはなをわたるところしづめへるかたへに藁吾青し ①	鈴 江 幸 太 郎
霧くらきアツツの島よ国民の永久のこころに哭きて思はむ ②	柴 生 田 稔
霧こめてまさ目に見えぬ遙けくも佐渡のあたりに心遊ばす ②④	吉 井 勇
霧こめて見るものもなき湖の上に旅の心ぞしづかなりける ②	高 橋 英 子
霧さむき夕山の上にとこころとし熔岩のかけを妹にとひろふ ①	五 島 茂 彦
霧さむく野をおほへども君とわが心のたぎち猶かたり立つ ⑦	島 木 赤 彦
霧雨にぬれてさやけき青き菜のつやつやしさに心ひかれつ （美穂）	上 代 皓 三
切支丹處刑の跡の川原に草の上のこころしばらく清し ①	與謝野 晶 子
霧嶋の高き峰をば行く日さへ心あがらずなりにけるかな ②②	島 木 赤 彦
霧とわが心は霧につつまれてとはに清らに人にさはるな ⑥	黒 沢 武 彦
錐のごとく心彫りゆくもの抱き底冷ゆる街の雑沓に揉まる ①	石 樽 千 亦
霧のため心をくたく船長に酒をわかつてなぐさむるかな ④	島 木 赤 彦
霧のなかに明るみ徹る肌のいろの心静けさに堪へられぬかも	森 二 郎
霧の中に足をとどめて独なる我れの心をかへりみにけり ①	

草刈の鎌つけて佇つ若者の太古の民のこころを知らず①	武川忠一
草枯れて石あらはるる山裾のみちを遠くきて心かなしむ④	太田水穂
草刈れば草刈る心きほふなりかくても吾の生けらく思ふ③	山下陸奥
草枯の吾子が墓べに置く霜のとけにじむ見つつこころなごまむ	斎藤茂吉
草木にも心のありといふことを教えむそして涙流れぬ①	森園天涙
草木らに心を寄する晩年をすがしとのみはわれは思はず②	山崎一郎
くさぐさのいろどりありて高き家古き代よりの心のこりける⑤	斎藤茂吉
草ごもり清水湧く幾とこころ心に持ちて春の谷地ゆく④	田谷鋭
草とりの水輪に光る梅雨あがりいらち心も落ちつきやすく①	荒木暢夫
草土手のくづれやすくも乾き照る春さきいろの心には沁む④	谷木暢
草ならば蔓いささかもをばさずて四五日ありと云ふべき心②①	与謝野晶子
草にすがり飛ばぬ二匹の螢見ばこころは痛し汝を思ひて③	吉田正俊
草にねて草の心となりけり陽にたしみて思ふことなく	生田蝶介
草にねて草の感じと日のくれのこころがしつくりとけあつてゐた①	清水信
草に寝てつばなを喰めば遠き日の幼な心のみがへり来る （新萬葉集五）	筑紫野春草
草庭に水打ちてやがて立ちそむるかすかなる風を待つ心なり③	小宮良太郎
草の青、野にひろびろとみなぎればかなしく重くなりゆくこころ②	岡田義郎
草の上の淡き冬日の夕づくにこころはいたし死に近き妻①	生田義郎
草の径のしげり夏ぐさふく風にこころ清々し朝露をふむ①	橋田東声
草のごと乱れしこころ一夜経てしづかにをりぬ妻のかたへに②	隅田葉吉
草の花におそれ度しむいとまあらずこころ無頼におちゆかむとす①	坪野哲久
くさの葉のつゆときえてもたたはしきこころの光りつくる日あらめや	安江不空
⑩ 草の葉のはじく光の中にしして崩れむ心ひたこらへをり （新万葉集三）	国島章江
草の原風にぞきほふ追ひ及かむこころの国の青くはろけく⑧	高田浪吉
草の径のしげり夏ぐさふく風にこころ清々し朝露をふむ① （地懐）	橋田東声
草の実のたけてはぢけば惆悵と心をうばふ風の冴えくる①	桐田露村
草の実の成れるに歩み止めをるその様な時わがこころ楽し	林菊之輔
草の実ほろほろおのづからおちる、この生慙の悲しさは人の心をうつ	前田夕暮
⑪ 草の芽のなかにとなくひた土に萌えいでてわが心いらだつ （山懐）	小宮良太郎
草の敷はいや昼深く明るめれこの悲しみを守る心かな	島木赤彦
草花に親しむ日々や老の春心安けく妻は暮すも	津端亨
草花をやしなふ心のしづけさをあらしのなかにあぢはひつつあり①	三井甲之
草ひばり真昼のこゑのかなしきを心にしめしあはれ幾年②	柴生田稔
草ふかき大観峰の頂の月見の宴は心にのこる	山下正次

くさむらにすだく虫の音ひるも夜もひたすらなればこころ疲るる⑤	米田雄郎
草むらにひそむ野鳥の心となり日あたりのよい窪みにねそべる④	米田雄郎
草や木のかろきそよぎもこころよしつかれてくさに身をしなぐれば①	奥川夢郎
草よりも敷石よりもすみやかに心の濡るる春の雨かな （新萬葉集九）	湯本みさを
腐れたり水辺に咲ける水色の勿忘草もわが心から③	今井邦子
奇御霊いまに生きゐて民草の心をつなぐ天地と共に③	中沢庭柯
くしけづるわが黒髪 （くろがみ） の素直さにいつしか心やはらぎにけり （新万葉集七）	松本富美子
串ざしに椿を貫きし鶴の篠少年はこころ簡明にして③	田谷鋭
来し方は悔のみ多し今年こそ心引きしめあらなと思ふ①	高橋俊人
鯨幕張りたる中に入りゆけりはおおそかに心しまるよ⑤	岡野直七郎
奇しきは巧まざるべし村肝のこころを揺りて吐く息の色⑧	尾山篤二郎
薬園 （くすりぞの） のぞき居る間に心こまかき友は葛粉を買ひくるるかな	土屋文明
薬をたのみし心いまはなし朝のくすりを飲みつつ思ふ④	今井邦子
屑簾 （くずりだ） にたまりし屑を捨てにゆき、かへり来れり、なんの心ぞ①	西村陽吉
屑米 （くずまい） の餉を母にまゐらせて田作われの心つつしむ⑤ （新萬葉集九・現代短歌全集）	吉植庄亮
葛城の神の岩橋 （いわはし） かたけれど心はかよへ云がけりても⑨	太田水穂
崩れむこころはつかに支へるる裸木となりし山にむかひて	葛原妙子
癖 （くせ） のなき人とならなむ心にも身のこなしにも言ふ詞にも①	武島羽衣
くたぶれし心の上にかさなりてかさなりて散る夜の花びら②	近藤元
くたぶれし若き心にひるがへる夏の真昼のひるがほの花②	近藤元
くたぶれて居りて我言ふ人毎にかへさむと思ふ心にあらず⑫	积空
砕かれし心の瓶になに汲まん愛よ呪いよ何もあらばあれ① （はたちのうた）	中原綾子
砕けしはがらすにかあらむ群集のかくて慰むこころは悲し⑦	土岐善麿
くだけ散るしぶきしら玉水けむり旅のこころに吾が立ちぬるる④	生田蝶介
砕けても心の臓より大なる椿の花と思ひけるかな②⑧	与謝野晶子
くだちたる琴の音きかずやまかぜのとをををを心はあらむ④	安江不空
降つ世の心くだちが歌はあれど歌のおほかた物足らずけり①	花田比露思
くだらなき話のなかにまじりつつ、嶮しき心、おほひかねつも①	西村陽吉
百済野をさぐるととほく旅を来て古代瓦に心よせめつ②	市山盛雄
九段より下に神田の白き道見るだに春は心ときめく⑭	与謝野晶子
口惜しき心すべないはけなく遊ぶ穉児を呼びて抱きあぐ	橋本敏夫
朽ちかけし大正期の煉瓦の病室よ壁のしみさへ心永久なる①	鈴鹿俊子
口数の少くてこころ温かに君は一生を貫きにけり⑤	吉野秀雄
口清く世俗の心などいひて神に甘えし時過ぎにけり	金子信三郎
くちぎたなく父を罵る今夜の姉もわれゆゑにかとこころ怯ゆる	若山牧水
口癖に忙しとのみぞあけくれの心にひびくになにとつなく② （角川文庫）	吉野秀雄

口癖に世の不景氣を云ひいでて事済むごとしこころ馴れけめ①
 口拙き父の言葉のかく迄に人の心に残れるを思ふ①
 接吻の一つ一つに恋人の身さへ心さへやせほそりつつ
 くちづけのあと心のいひすてしその肉にまたも逢へるか②
 くちづけよ、はたうち棄てよわが心花束のごと君の手に置く③
 口づけを嫌ふ少女も別れ居て心がすはひとしきのものを④
 口吃り心を言葉となし得ぬのみ伸び遅き児と誰か吾児を言ふ⑤
 口中の瘻すみやかに癒ゆるごといなむか深き心の疼み⑥
 くちなしの芽にからまれる花かづら切りはなしつつ心寂しも⑦
 梔子をコヨブに生けつこの花の白一輪にわがこころ足る⑧
 口にしてうまさこの酒ころにはさびしみおもひゆふべ酌む
 口にして吹きこころむれば笛の鳴りぬ、あはれる音にわれをとらへて③

口に出してまことしやかに言ふやつの醜の心を今ぞ見ぬきぬ①
 口のうちに息をふくめては ぷつと吐く、この、いとほしき、さびしき心。①

口癖のおほむね白くなりたるに慚づらくはいよよ心をさなき②
 唇とけて紫しほる藤の花思ひあまりし心といはん③
 くちびるに紅茶のカップふるるときその温みにもこころ親しき④
 くちびるにふとのほること我れながら心に迫る醜けれども⑤
 くちびるに触り来る雪のしげくなり歩めるわれの心みちくる⑥
 唇をこぼみ腕もまたこぼむ君が心は冷えにけらしな⑦
 口笛を吹きつつ心励して夜更けの路を配達にゆく⑧
 口紅をつけぬをとめの潔けれどこころやすらにわれは対ひぬ⑨
 口もとと眼の皮肉なる微笑みはわれの心を寒くあらしむ⑩
 口をきけば案外やさしい言葉つきのこの職工のまじめな心⑪
 屈曲のこころ放ちて仰ぐらく白梅にさむき光射したり⑫

くつがへる世をおもしろとたのしまむ心はたしてありやあらずや⑬
 くつきりと秋のダリアの咲きたるに倦める心は怯えむとする⑭
 くつきりと秋も終りの空をゆく雁の列にて心執する⑮
 靴下のやぶれつろひ二日をわが心からやすらけきかも⑯
 靴すべる岩群の上に幼児は歩みあやぶむ心弾みつ⑰
 窮すれば心愈よまじめなる我が真実も悲しかりけり⑱
 靴ずれを忍びてあゆむいたいの子が踵にしいたむ心ぞ⑲
 くつとひくその手応へのしかさに時到期ぬと心はやるも⑳
 靴の泥を反古もて拭きつ 忙しく働きたる後の ほうけしこころ㉑

塚田 善紀
 山田 ゆり子
 堀口 大学
 土岐 善磨
 西川 百子
 與謝野 晶子
 宇都野 研
 相良 義重
 築地 藤子
 岡本 大無
 若山 牧水
 松村 英一
 岡野 直七郎
 土岐 善磨
 白井 大翼
 和田 智恵子
 金子 薫園
 與謝野 寛
 小暮 政次
 吉井 勇
 加藤 啓助
 鹿兒島 やすほ
 津端 修
 西村 陽吉
 宮川 柊二
 前川 佐美雄
 若山 牧水
 長沢 美津
 今井 邦子
 広野 三郎
 鬼平 一郎
 土岐 善磨
 福田 咲
 土岐 善磨

屈原を弔ふこころ一つなれどおのの時と世を憤る②⑦
 くつろぎて昨夜も今朝も湯に入ればわが心さへ弛びし如し⑥
 くづほるこころこらへて居たりけり十字街あかるく夕光とどく①
 壊はれし心のままに今日も経ぬ蘇る日を待つとしもなく②
 くづまゆの糸を集めてはたに織る妻の心にある日感動す
 くづれたつこころはいかにいたきまで和にぎしかるすがたひき放つ③
 くづれたる心ながめぬ初秋の日にむされたる野の草のなか④
 くづれをし心の底にいくばくの理想たもちて生くる日かなし⑤
 くづをるる心支へて生きつげる父は羅漢に似て老いづきぬ
 くづ折れすがらむとすれど母のこころ悲哀に澄みて寄るべくもなし
 崩れん心は持たず折りふしの雨に矢車の花の水紅色⑥
 国境のもみづる山を近く見て心は澄むを相共にいふ⑦
 火難負ふこころくじけてあらねども菜花を見ればなばなあかるし①
 国挙り心よりする飲びの声あげしむる皇子生れましぬ③
 国思ふあつき心の行き交へるむねゆだねしかこの低き窓に⑤
 国思ふふ心はもととどまらず雨はさ青の芒を流らふ
 国越えの汽車の玻璃窓凍みくもりいたむこころをひらく方なし②
 国こぞり激り心と激りしをはや物憂しといふ顔ぞする④
 国こぞり心ひとつとふるひ立つ軍の前に火も水もなし
 国こぞる大敵は新聞にラジオに溢れこころにぎはし②
 くにたみの千千にこころをくだく世をおもひぞあかす秋の長夜に①
 国民がこころこころに進みゆく道にはささるものなくもかな②
 国民のひとつこころにつかふるもみおやの神のみめぐみにして①
 国民はひとつ心にまもりけり遠つみおやの神のをしへを①
 国近く勤かへよといふ母のこころ一途なり手紙のなかに③
 国土権く、世は太初に還るらし、心むなし、大庭に居り
 国つ御民こころ明らに朗らにと新しき光天をおほへり⑧
 国土に雪みだれ降る日をつぎて戦ふこころ徹らざらめや⑫
 国つ御民こころ明らに朗らにと新しき光天をおほへり⑧
 国土の南の涯の寂けさや現しき心きはまりにけり④
 国遠みあふことまれにあり馴れて居間も在りわが心には③
 国とほき磯辺の宿に一人ぬし心をぞ思ふいまは世になし①
 苦になりおし仕事の一つ果したる心だのみひと日続かず⑦
 国難に笑みて堪へ来し姪なりと述べては祝ふ心ふかき叔父②
 国に殉ずる心はもてど国われを用ひずむし酒に死なまし③
 国の心ふかく透れる村に來ぬ堆肥さはに積みて村ゆたかなる⑩

土岐 善磨
 花田 比露思
 堀内 通孝
 尾上 柴舟
 唐沢 時雄
 坪野 哲久
 前田 夕暮
 前田 透
 山内 英一
 若山 牧水
 高安 国世
 吉野 秀雄
 小名木 綱夫
 窪田 空穂
 榎富 照子
 北原 白秋
 小田 観螢
 斎藤 茂吉
 伊藤 左千夫
 神原 克重
 明治 天皇
 明治 天皇
 明治 天皇
 明治 天皇
 明 天
 明 天
 明 天
 今井 猛夫
 釈 迢空
 佐佐木 信綱
 斎藤 茂吉
 佐佐木 信綱
 松岡 貞綱
 岡田 貞綱
 高田 浪吉
 長谷川 銀作
 窪田 空穂
 岡本 大無
 吉植 庄亮